

動物のこころ

薬学部教授 藤原道弘

ヒトの脳機能を知る上でネズミを用いた行動薬理学的手法が重要な働きをしている。しかし「ネズミの脳機能からヒトの心が判ってたまるか」と思っているヒトが大半である。しかしながら怒り、恐れ、不安、快・不快などの情動の場である大脳辺縁系は神経ネットワークやそこに働いている神経伝達物質が共通していることから、情動に関する研究は十分に可能である。なお、動物もヒトと同じように行動を起こす前に脳の中で意識的な思考を経て表出したかどうか論点になる。

なぜなら他の動物に意識があるとすれば、それは私達の行動にも大きな影響を及ぼすことになるし、人間の輪の中に入れることによって動物への対処の仕方も大きく変わらなければならないからである。また、研究に不可欠な実験用ネズミへの対応も明確になるであろう。そのことが、脳機能研究の中で最も厄介な深淵な湖のような意識の問題に挑戦する機会となるからである。もし、この意識の問題を行動薬理学者が科学的手法で研究できるようになれば、無意識の状態で貯蔵されていたイメージや記憶が意識によってどのような方法で蘇らせることができるのか。また、行動を起こす前に、予め意識で問題を考え、目的を達成させるための戦略が、どのようにして頭の中で展開されるのかなどが明らかにできる。すなわち、脳の神秘的な部分のほとんどが解決されていくことを意味するであろう。

これまでの動物の心に関する研究は、多くの動物行動学者が緻密なフィールドワークによって動物たちの心の世界を明らかにしてきた。これらの客観的事実が、心を否定してきた心理学者達にとっても今では動物が多能な行動やコ

ミュニケーションを表す場合はその背景に意識的な思考をしている可能性を容認せざるを得ないところまできている。我々も長年の研究でネズミと付き合っている中で、研究室内のネズミの行動観察を通して彼らの心の存在を考えてみることにする。実験用ネズミが、なんらかの行動を起こす前に、脳内で意識的に、感情、恐怖、快、思考などの心的体験をしていると仮定すれば、種々の実験条件に対するネズミの適応能力、中でも記憶力や認知機能など彼らの高次機能の高さには驚かされている。例えば、8方向放射状迷路を用いた記憶学習実験では、ネズミの脳の中に8方向放射状迷路の認知地図がイメージとして確立し、そのイメージの中で選択している自分を自覚することによって遂行できる。

弁別学習実験では、記憶した形と餌の関連を変更すると、予想を裏切られた時のネズミの戸惑いを見ることができる。そして直ちに修正を行うこともできる。まさに心の存在を肯定するような「自分を取り巻く環境を自覚」しているようだ。

また、動物のコミュニケーションも動物のこころを知る上で有益な手段である。例えば捕食する側とされる側、あるいはその仲間同士のコミュニケーションを研究すれば、お互いの感情や考え方についても客観的に立証されると思われる。一方では、この思い込みが過ぎて、数を数えたり、暗算ができる賢馬のハンスみたいな笑い話への展開を恐れる。心の研究はあくまでも科学的根拠を伴わなければならない。蛇足ながら自分というものは皮膚という袋の中に入った唯一のものであって、他人の袋と共存することはできない。私は私である。まさに禅問答にも似た悟りの世界にも広がるのも一興である。